

つまづく

マルコによる福音書 14 章 27～31 節

イエスさまがロバの子に乗ってエルサレムに入られ、十字架にかかり、葬られ、三日目に復活なさるまでちょうど 1 週間です。棕櫚の主日とよばれる日曜日から、月曜・火曜には反対者たちと討論をなさり、もう誰も質問する者がいなくなります。この日の最後に主イエスは神殿の崩壊を予告されます。水曜にはベタニアで香油を注がれる出来事があり、イエスさまはこれを葬りの支度をしてくれたこととして喜ばれました。油注がれた者をヘブライ語でメシアといい、この日、この女性がイエスさまに香油を注ぎかけたことで苦難のメシアの預言が半分成就したことになります。そして過越し祭が始まり、木曜の夕方からその最大の行事である過越しの食事、いわゆる最後の晩餐になります。じつはユダヤでは一日の始りは夕方から数えますので、この過越しの食事から翌日の夕方までが金曜日になります。この食卓でパンと杯を弟子たちに分かち与え、それをご自身の死と結びつけられ、新しい救いの契約となることが示されます。それから今日のテキストの裏切りの予告、ゲッセマネの園での祈りと逮捕、最高法院での審判、ピラトのもとに引き出されての死刑判決、十字架とその死が午後 3 時ごろとなります。イエスさまの埋葬は日暮れに近づき、そこから土曜日、つまりユダヤ教の安息日が始まるために、簡単な処置しかできずに墓に納めたとマルコは記します。すでにイエスさまの十字架の死まで 24 時間を切った。いわば土壇場にきたイエスさまと弟子たちの姿をわたしたちは見ているのです。今日の出来事の舞台は、「食事を終えると一同は賛美の歌をうたってからオリーブ山へ出かけた」とあります。オリーブ山は緩やかな谷をはさんでエルサ

レムをのぞむ丘陵地でここにオリーブの果樹園、ゲッセマネの園が広がっていました。そこへ向かう道すがら、イエスさまは、これから起きる出来事によって、あなたがたはみなわたしにつまづくだろうという予告をなさったのです。このとき、主イエスが引かれたのが旧約聖書ゼカリヤ書 13 章 7 節以下です。じつは今回、御言葉に向き合っていて長年の疑問が解けたのがこの個所でした。それはなぜイエスさまはオリーブ山のゲッセマネの園に行かれたのかということです。べつに過越祭の日に外出が禁じられているわけではないのですが、あえて食後、これはもう時間的には真夜中近いのですが、そんな時間になぜオリーブ山に向かわれたのか、これもじつはゼカリヤ書に答えがあったのです。今回、わたしは、マルコによる福音書の描き出すイエスさまの最後の 1 週間の振舞いのすべてにゼカリヤ書の預言があったということに 27 節の「あなたがたは皆わたしにつまづく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』と書いてあることから気づかされたのです。まずエルサレムに入られるときに、ロバの子に乗って入られたというあの有名な出来事が預言されているのはゼカリヤ書 9 章 9 節です。イスラエルを救う王は「高ぶることなく、ろばに乗ってくる」(9:9)、そのようなメシアに変化している。預言者ゼカリヤはバビロン捕囚から帰還した人々に向かって破壊されたエルサレム神殿の再建を呼びかけた預言者です。すでにイスラエル民族の政治的独立は失われ、彼らはペルシア帝国の属州に位置づけられていました。ゼカリヤの目の前の故郷は荒れ果て、四方は敵対する民族に囲まれていました。エルサレムの城壁は破れ、神殿も破壊されたままです。このときの預言者の呼びかけによって再建されるのがイエスさまの時代に問題となる第二神殿なのです。イエスさまはゼカリヤの預言通りにロバに乗ってエルサレムに入られ、まっさきに神殿に向かわれ、祈りの家ではなく、さま

ざまな商売の場となっていた神殿を清めました。じつはこれもゼカリヤの預言の実現です。「万軍の主の神殿に、もはや商人はいなくなる」というのが預言者ゼカリヤの最後の言葉なのです。そして、イエスさまはマルコによる福音書 13 章では神殿の崩壊を予告しておられる。信仰生活をささえ、彼らの存在に意味を与える神との出会いを妨げている神殿を新しくすることがご自身の使命であることを理解しておられたのです。そのために動物犠牲のメッカであった神殿の役割を、いまだに続けられている過越しの小羊の犠牲の上にたつ神と民の間の交わりを、ご自身を犠牲とされることでまったく新しい契約へと変えてゆかれる。それがロバの子にのって平和と和解の使者としてエルサレムに入られた苦難のメシアの働きでした。明らかに、イエスさまは自分よりも 500 年近く前に活躍し、神殿の問題に向きあった預言者ゼカリヤのビジョンを共有しているのです。そして、オリーブ山に向かわれる途中で、やはりゼカリヤ書 13 章にある預言から、羊飼いが打たれ、羊の群れが散らされるとの預言をひきます。しかし、これはゼカリヤ書 12 章から 14 章まで、新共同訳旧約聖書の小見出しに従えば、「エルサレムの浄化と救い」と名付けられた最後の単元の一場面であり、裁きの末に、ついに新しく主が降臨される救いの時の訪れを告げる場面へと続くのです。そして、この救いの希望はやがて、主がすべてとなるただ一つの日への憧れとなります。ゼカリヤ書の最後の章である 14 章 1 節は「見よ、主の日が来る」と歌いだされます。そして、14 章 4 節以下に次のような御言葉が記されているのです。「その日、主は御足をもってエルサレムの東にあるオリーブ山の上に立たれる。オリーブ山は東と西に半分に避け、非常に大きな谷ができる。山の半分は北に退き、半分は南に退く。あなたたちは、わが山の谷を通して逃げよ。～ユダの王ウジヤの時代に、地震を避けて逃れたように逃げるがよい。わが神なる

主は、聖なる御使いたちと共に、あなたのもとに来られる。その日には、光がなく、冷えて凍てつくばかりである。しかし、ただひとつの日が来る。その日は、主にのみ知られている。そのときは昼もなければ夜もなく、夕べになっても光がある。～主は地上をすべて治める王となられる。その日には、主が唯一の主となられ、その御名は唯一の御名となる」。

いかがでしょうか。オリーブ山はここに出てくる。イスラエルの希望は、主が、王となられる終わりの日におかれまして。主ご自身が、御足をもってオリーブ山に立たれるとき、山は東西に裂け、大地も溶けて、世界は新しく変り始めるとゼカリヤはいうのです。新しい創造といっても差しつかえのない神の御業による救いが現されるのです。人の手によるのではなく、神がわたしたちの王となられるとき、すべてが恵みの光の中に置かれる、「夕べになっても光がある」。ゼカリヤのこの預言に忠実にイエスさまは行動しておられます。なぜオリーブ山に行かれたかが長年疑問だったのですが、それは預言者ゼカリヤのビジョンの実現であったのです。いま主ご自身がやって来て下さった。そして、ゼカリヤから預言を引いたイエスさまは、ゼカリヤが谷を抜けてゆく救いの道筋を示しているように、このあと地面にぱっくり穴が開いて弟子たちを飲み込んでしまうかのようなイエスさまの逮捕、羊飼いが取り去られ、十字架で死なれる。羊たちの大混乱、すなわちつまづきの後に、彼らが逃れてゆく道筋を示しておられます。「しかし、わたしは復活したのち、あなたがたより先にガリラヤへ行く」という約束がそれです。ここに導きの糸がすでに張られています。主は弟子たちが崩れ去った後の、その先にまなざしを注いでおられる。主イエスご自身がゼカリヤの取り次いだ神の言葉、預言の導きに従って歩んだように、弟子たちも、わたしたちも主が語られたお言葉に従って歩むことが出来るのです。これはいわゆる「転ばぬ

先の杖」ではない。むしろ盛大に転んで、もう立てそうにない。大言壮語した手前、会わせる顔もない。その後生きながらえたならば、ずっとこの出来事の記憶を墓場まで持ってゆくような挫折、天地がひっくり返るようなショック、そういう心がぽっきり折れてしまったような状態から、新しく立ち上がり、歩むことが出来るように、主は復活ののちの再会を約束されておられます。ここに主の恵みのご支配がある。このときペテロは「たとえみんながつまづいても、わたしはつまづきません」と言い、これに対してイエスさまは「はっきり言うておくが、あなたは今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないというだろう」と言われました。ペテロはさらに「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないとは決して申しません」と請け合い、皆の者も同じように言ったとあります。しかし、わたしたちは、このあとどうなったかを知っています。ユダも、ペテロも、全員が主につまづくのです。あなたがたは皆わたしにつまづく、と主イエスが言われた通りになるのです。イエスさまは人間の弱さをよく知っておられました。ペテロは「死ななければならなくなっても、決して～」という決意を表明しますが、そういうことで人間の問題は解決しないのです。聖書はしっかりそこを見えています。自分は大丈夫、出来るではなく、大丈夫ではない、出来ないということ、自信によって生きようとする人間の危うさ、いとしさ、哀しさをマルコはつきつけます。キリストはわたしたちの弱さをよくご存じで、そのうえで導きの糸、招きの言葉を常に与えておられる。御言葉の中にあるこの主の配慮、恵みのご支配を見て取り、委ねていくことが、つまづきの避けられないわたしたちの人生を支えるただひとつの道であることを教えられます。

お祈りいたします。